
アルストリア国際製靴学校研修体験記

日程：令和7年9月1日－11月14日

廣瀬 友和
米田 秀

はじめに

本派遣事業は、都内皮革関連産業に携わる人材が海外において専門的な研修を受け、技術力および国際的視野の向上を図ることを目的として実施されています。私達は日本において注文靴の製作に携わり、主に型紙製作および底付けを含む製靴工程全般を担当してきました。

実務を通して技術を磨く一方で、経験則に依存しがちな設計工程を、理論的かつ再現性のある形で整理する必要性を強く感じるようになりました。こうした課題意識から、国際的に通用する設計理論や教育体系を学ぶため、本派遣事業に応募しました。

本報告では、アルストリア国際製靴学校（以下、「学校」という。）におけるパターンメイキングコースでの研修内容と、そこで得た知見を中心に、本派遣事業を通じて得られた成果について報告します。

事前準備・派遣前学習

現地研修に先立ち、学校より事前学習用のオンライン教材が提供されました。内容は靴の基本構造や名称、デザインの分類、材料および副資材に関する解説などで構成されており、授業で用いられる専門用語や考え方を事前に把握することを目的としたものでした。

すべて英語で解説されていたため、語学面での予習としても重要であり、現地での

授業理解を助ける基礎的な準備となりました。

学校と生活について

この学校は1947年に開校し、イタリア・ミラノに拠点を置いています。靴及びバッグの製作について、設計から製造までを体系的に学ぶことができる歴史ある教育機関です。

50か国以上から学生が集まるインターナショナルスクールで、多国籍な環境の中で学ぶことができた点も、本研修の特徴の一つでした。授業は月曜日から金曜日までの週5日制で、月曜日から木曜日は9時から17時まで行われ、金曜日は午前中だけの授業でした。

学校はビルの地下に位置し、同一建物の上階には学生用の寮が併設されており、通学の負担が少なく、研修に集中しやすい環境が整っていました。生活環境が安定していたことは、研修内容への理解を深める上でも重要であり、限られた派遣期間を有効に活用するための基盤となっていました。

クラスについて

私達が参加したパターンメイキングコースのクラスは、インド人2名、インドネシア人3名、イタリア人2名、モザンビーク人1名、そして私達日本人2名の計10名で構成されていました。国籍や文化的背景は

多様でしたが、多くの受講生は型紙製作の実務経験がなく、基礎段階から学ぶ必要がある状況でした。

そのため授業は初歩的な内容から丁寧に進められ、講師による説明も段階的で理解しやすいものでした。英語で行われる授業のため、内容の把握に時間を要する場面もありましたが、基礎から確実に積み上げていく授業構成は、私達にとって非常にありがたいものでした。

また、クラス規模が比較的小さかったこともあり、講師との距離が近く、質疑応答や意見交換が活発に行われました。製靴に関する文化の違いや現場の考え方に触れる機会も多く、技術面のみならず、靴づくりに対する視野を広げる上でも有意義な学習環境でした。

授業内容と技術的な学び

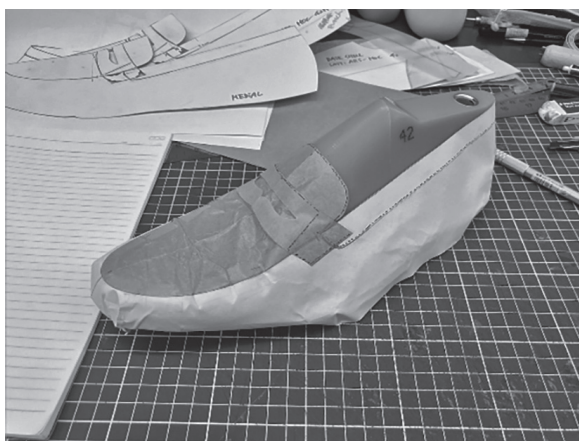
授業は講師2名体制で行われ、講師の実演を確認しながら、生徒が都度作業を進めていく形式で進行しました。作業工程や手元は常に確認できる環境が整えられており、英語での説明がやや難しい場面においても、視覚的に内容を把握することができました。

学校では、型紙製作に先立ち、木型にテープを貼り付けてベースシェルと呼ばれる原型を作成します。そこから平面上でデザインを作図していく手法が用いられており、木型に直接デザインを描く日本での一般的な手法とは大きく異なっていました。それぞれのデザインに対して規定の数値を用いてデザイン線を引くことで、構造的に理にかなった型紙製作を再現できる点は、設計を理論として整理する上で非常に重要な学びとなりました。



講師による実演の様子

授業は、プレーンパンプスやバレリーナといったパーツ構成の少ないレディース靴から始まり、サンダル、ローファーと段階的に難易度が上げられていきました。ダービーやオックスフォード、アンクルブーツなどについては、メンズ、レディース共通の工程で型紙製作を行います。性別によって用いられる数値が異なるため、当初は混乱する場面もありました。しかし、多い日には1日4デザイン、少なくとも2デザインの型紙製作を行う反復練習を日々重ねることで、徐々に理解が深まり、対応できるようになりました。



ベースシェルとペーパーテスト

また、金曜日の午前中には、PCを使用した2D CADソフトによる授業が行われました。イタリアの量産靴生産の現場で実際

に使用されているソフトを用い、長い間アナログで行われてきた型紙製作が、量産工程の中でどのようにデジタル化され、運用されているのかを理解する機会となりました。

さらに、専門の講師による製甲の実技授業も数日設けられていました。校内には日本ではあまり見ることがない機械や最新設備が揃っており、実技授業の際には生徒の関心も高く、日本とは異なる道具や工程に触れることで、製靴工程を多角的に捉える視点を得ることができました。

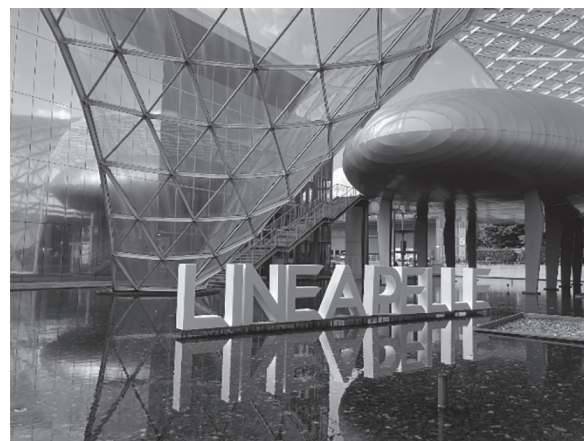
授業の理解度を確認するため、毎週月曜日には前週の内容に関するテストが実施され、最終週には卒業試験が行われました。試験中は資料の持ち込みやスマートフォンの使用が禁止されるなど、厳格な管理の下で実施され、実技試験では紳士靴のデザインを一足分、制限時間内に型紙を製作しました。加えて、口頭試験では各国で用いられている異なるサイズ表記の換算や、授業で学んだ底付けの方法などが出題され、構造理解や理論面での習得度が問われました。

展示会について

派遣期間中には、靴の展示会であるMICAM（ミカム）と、革の展示会であるLINEAPELLE（リニアペッレ）が開催されました。MICAMは土日に開催されたため休日を利用して参加し、LINEAPELLEは平日開催であったことから、授業の一環として参加する機会を得ました。

クラスメイトの中には、インドのタンナーに勤務し、出展企業の一員として参加している人もおり、展示ブースの中を案内していただきました。出展者の立場から展示内容や素材の特徴について説明を受けることができたことは、通常の来場者としての見学とは異なる貴重な経験でした。

LINEAPELLEには、イタリアやヨーロッパのタンナーのみならず、世界各国の企業が出展しており、多様な革素材や副資材が紹介されていました。展示規模も非常に大きく、全体を見て回るには一日を要するほどであり、国際的な皮革産業の広がりや動向を体感する機会となりました。



LINEAPELLE会場の様子

靴博物館訪問

週末の休日を利用して、イタリア国内を含むヨーロッパ各国に所在する靴博物館を訪れる機会を設けました。

イタリアにある Museo Rossimoda della Calzatura は、婦人靴メーカーである Rossimoda 社が運営する靴博物館で、ミラノから電車で約4時間の場所に位置しています。同社は、有名メゾンブランドの靴を製造する OEM 工場として発展してきた背景を持ち、館内にはFendi、Dior、Saint Laurentなど、数多くのブランドの婦人靴が展示されていました。これらの展示を通じて、戦後のイタリア靴産業がどのように発展してきたのかを、実物資料を通して立体的に理解することができました。

また、フランス・ロマンズ＝シュル＝イゼールにある Musée de la Chaussure では、16世紀から現代に至るまでの多様な靴の歴史が紹介されていました。館内には、世界



Museo Rossimoda della Calzatura

各国の靴を中心に、貴族の礼装靴から現代デザイナーによる作品まで、約4,000点以上が展示されており、とりわけ20世紀のデザイナーによる作品の展示が印象的でした。

アンドレ・ペルージャ、ロジェ・ヴィヴィエ、クリスチャン・ディオールなど、名だたるデザイナーの靴が一堂に並び、それぞれの時代における美学や構造的な革新を通して、靴がファッションの中で果たしてきた役割を実感することができました。第二次世界大戦後のフランスにおけるモードの発展と靴デザインの関係性についても、資料やスケッチとともに詳細に紹介されており、当時の創造性と工房技術の結びつきを具体的に学ぶ貴重な機会となりました。

そのほか詳細については割愛しますが、Northampton Museum and Art Gallery (イ



Musée de la Chaussure

ギリス)、Museo del Calzado (スペイン)、Museum of South-East Moravia in Zlín (チェコ) など、イタリア国外の靴博物館にも積極的に足を運びました。ヨーロッパ各地の靴産業の集積地にある博物館を訪問することで、それぞれの地域に根差した製靴産業の発展史や特徴を知ることができ、靴づくりをより広い視点から捉える契機となりました。

まとめ

本派遣事業を通じて、私達はアルス国際製靴学校における型紙製作を中心に、設計理論や国際的な靴産業の動向について多くの知見を得ることができました。とりわけ、数値に基づいた再現性の高い型紙製作の考え方は、日本での実務を見直す上でも貴重な学びとなりました。

また、国籍や背景の異なる受講生と共に学ぶことで、靴づくりに対する価値観や課題意識が国や地域によって異なる一方、構造理解や設計の重要性といった点には共通する考え方があることを実感しました。これらの経験は、靴づくりを国際的な視点から捉え直す良い契機となりました。

今後は、本研修で得た知見を自身の製靴実務に反映させるとともに、若手職人や同業者との情報共有を通じて、日本の靴づくり全体の底上げにつなげていきたいと考えています。

イタリアにおいては非常に有意義な2か月半を過ごすことができ、このような貴重な機会を与えていただいた関係者の方々には深く感謝しています。本派遣事業が今後も継続して実施され、国内皮革関連産業の発展につながっていくことを切に願い、本報告のまとめとします。